



Title	井戸さんの思い出
Author(s)	下内, 昭
Citation	井戸武實の歩みと追悼集. 2025, p. 24-25
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/100728
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

井戸さんの思い出

下 内 昭

公益財団法人結核予防会ネパール事務所・結核研究所

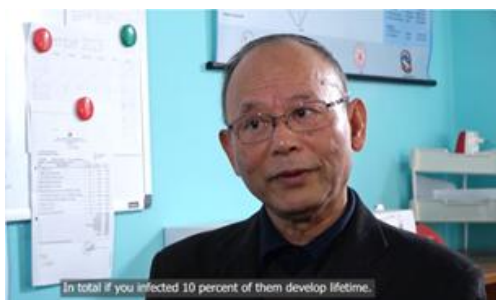
一番思い出深いのは、私が大阪市に赴任した 2002 年には、大阪市保健所が、西成区あいりんでのホームレス対策を強化しており、その頃に HESO が創設され、井戸さんが事務局長をされていた時である。当時は、釜ヶ崎支援機構が運営するシェルターの横のプレハブ事務所の二階に、HESO の事務局があり、私もよく訪ねた。私も厚生労働省からの研究費で高齢者特別清掃事業に従事する人たち（特掃従事者）の健康を支援する目的でスタッフを一人雇うことができ、彼の仕事を通して、HESO との緊密な連携ができた。さらに、最も大きな動きは高鳥毛先生、黒田先生、逢坂先生らが、特掃従事者の結核検診を実施するだけでなく、あいりん地域では定期的に結核検診を実施していたが、そこに 2006 年にデジタル撮影 X 線機器を搭載する検診バスの導入に大きな役割を果たして下さったことである。その後も、種々な面から、あいりん地域でのホームレスや生活保護受給者からの患者発見と患者支援に関する対策が改善されていったが、行政だけでは限界があり、釜ヶ崎支援機構をはじめとする、いろいろな NGO の支援・協力なしでは、どの対策も進めるのは難しかった。その中でも、各 NGO などとの調整と下支えをして下さったのが、HESO であり、毎日、シェルター横の事務所におられ、特掃従事者のおちゃん達のお世話をしていたのが井戸事務局長である。これは、皆さんご存じのことであるが、井戸さんは、いつも明るく、前向きで、どんな困難な事があっても、決して弱気なことは言わず、いつも、良くなっていくと信じておられた。その明るさに私も随分助けられた。特に思い出すのは、多剤耐性結核患者で治療に非協力的な人がおられたが、井戸さんは、マスクをつけずにその人の家にいったり、車で待ち合わせをして、説得して下さったり、やがてはその人も治療を再開することができた。私たちは、外であれば、風が吹いているので、結核患者とは少し離れて話せば、感染するおそれはないと健康教育をしていたが、なかなか、多剤耐性患者に何度も会いに行くという熱心さはない。やはり、井戸さんの、その素直な熱心さが患者さんにも伝わり、薬を再び飲むようになってくれたのではないかと感心する。

また、HESO の事務局長が終わり、大阪公衆衛生協会の事務局長になってからも、あいりんの結核対策などを見学に来る方々を随分お世話して下さった。私がいりん分館に勤めている時に、よくあったコースは、大阪社会医療センターで工藤先生の臨床の講義を聞き、あいりんシェルターの見学、私が毎日、結核検診の画像の読影をしていた西成区保健福祉センター（あいりん）分館、その他の NGO の紹介、また、三角公園付近散策などのコースもあった。それを、疲れもせず、どなたからの希望があっても、丁寧にプログラムを作成し、区役所に対して、依頼状を作成して送付し、研修を受ける人の名札を作成し、講義では講義資料を作成し、最後に記念写真を取り、皆さんに配って下さった。それを、一年間に何回あっても、毎回、同じように熱心に計画し、暑い中でも付き添い、お世話をしてくださった。その中には、結核研究所のアジア、アフリカの医療従事者の国際研修も何回かあ

り、研究所のスタッフ、JICAの担当者と共に、あいりんの中を回って下さった。いろんな調整で分館に電話がかかってくる時はいつも大きな声で挨拶をしてくださり、簡潔に用事を伝えてくださる。時に、サプライズ訪問に来られる時にはいつも、何かお菓子を持ってきて、分館のスタッフに気を遣って下さった。

勉強会の事務局のほかに、私が存じ上げる、もう一つの思い出は、亀田先生をよくお世話しておられたことである。と言っても、私自身は、亀田先生と日常的にお会いしたのは、大阪市の結核診査協議会委員長を終わられ、大阪自彊館診療所に勤めておられた最後の時に、私も、その診療所に金曜日に外来診療をさせていただいた時だけのことである。亀田先生は、はじめはお元気であったが、少しずつ身体が弱っていかれ、歩けなくなった時に、井戸さんに誘われて、お見舞いに行ったことを思い出す。亀田先生がお元気な時は、結核病学会では、よく最前列に亀田先生のとまりに井戸さんが座っておられてお世話をしておられた。それは、ある意味、当然のように感じていた。しかし、身体が弱くなられた時こそ、気を遣って、よく会いに行かれて元気づけられていた、その優しさを本当にえらいと感じた。

このように私が井戸さんにお会いしたのは、診療放射線技師としての専門の仕事から、事務局という縁の下の仕事に重点を移してから時期であるが、他の人々を支援する、そのために面倒な細かい仕事を限りなく続けることを、疲れを知らず続けられておられたのではないかと。私も、また、今、ネパールで仕事をする時、苦勞する時も楽しくできなければ意味がないと、井戸さんを思い出す時に、感じるこの頃である。



私の近況：2022年4月からネパールで日本では常識であったX線による集団結核検診の実施方法をまずカトマンズ市で確立し、次に全国に広げるプロジェクトに関わっています。ネパールではいろいろな事情でなかなか仕事が捗らないですが、同僚とともに、忍耐し、諦めないで、特に貧しい人々の結核を診断し、治療が行き届くよう、毎日頑張っています。



「Strengthening Urban TB Program in Kathmandu Metropolitan City by Active Case Finding.」 「積極的な患者発見によるカトマンズ市の都市結核対策プログラムの強化」 結核予防会のネパールにおける結核検診活動広報ビデオ(英語版・約20分)より抜粋。制作：公益財団法人 日本結核予防会(JATA) & 一般社団法人 日本ネパール健康・結核研究会(JANTRA) <https://youtu.be/GxZj-vdOzXI>